

金属修復物撤去、連結補綴物撤去による 全身症状の軽快症例

歯科修復物が 心身をむしばむ！

私は、医療とは心身をナチュラルな状態に戻すことをゴールにすべきものだと考えています。しかし、歯科においては、生体の自然なあり方からかけ離れた処置介入が当たり前のようになされてきました。イオン化して溶出したり、電流の原因になる歯科用金属による修復や、歯1本ごとの生理的動揺を妨げてしまう、連結などの補綴処置。これらは、心身のナチュラルな状態を損なうものであり、症例によっては生体為害性を及ぼす可能性があります。これらの修復補綴物を撤去することで、患者さんの症状が軽快した例を具体的に紹介します。



大阪府開業
中垣直毅氏
Nakagaki Naoki



生体為害性金属
当たり前前に用いられている
材料が…

当院では、金属性修復物の使用について極めて慎重な対応を取っています。第一には、修復補綴の適応にならないように、定期的な予防歯科医療を受けていただくことを推奨しているのですが、多くの患者さんは、初診時に何らかの修復補綴処置をすでに受けており、その中に、
・原因不明で難治性の慢性症状を訴えて受診する

患者さんがいます。私は、そういった症状の原因の一つに、生体為害性を持つ金属性修復物が介在していると考えています。歯科用金属に起因する金属アレルギー症状については、歯科医療者の間でも一定の認知を受けていますが、主として、67ページ表のような金属に生体為害性が認められます。歯科用金属の生体為害性としては、金属アレルギー症状(遅発性アレルギー)が広く知られていますが、それだけでなく、溶出した金属イオンによる毒性の発現(発がん性も含む)、ガルバニ電流による肩凝りなどの慢性症



個室診療室の隣には広い空間がつながっている。これは、身体運動機能の測定や、重心バランスを診断し、全身を診ながら問診するために有用なエリア。

主な生体為害性金属とその特徴

アマルガム	水銀を50%含むアマルガムの害は国内外で広く知られている。毒物である水銀の溶出による健康被害が指摘されている
金銀パラジウム合金	疫学的な金属アレルギー検査で、約半数の人に陽性反応が出る。ドイツ保健省はアマルガムと並んで歯科医療で用いないよう勧告している
ニッケルクロム合金	発がん性物質を含んでいるという指摘がある
銀合金	酸化してさびやすく、すぐ黒色になるため、歯質や歯肉の変色、イオン溶出のリスクが高い
金合金	例えば18金や20金の場合、金以外の銅やパラジウム、銀などの成分にイオン化傾向があり、イオンが溶出するリスクがある
チタン	身体親和性が高いとされているが、利点でもある「硬い」という特性が対合歯を痛めたり、撤去の際に削りにくく、多大な身体的負担となるリスクがある。また、電磁波を集めやすくなる。フッ素により溶解するという報告もある。
セメント	ノンメタル治療の際に、セメント材料に微量の金属が含まれている場合があり、アレルギーとなり得る



金属性の歯冠修復物が帯電して、さまざまな全身症状を引き起こしているケースが多数認められる。そこで、『オーラルテクター』(左)、『ゼロテクター』(右)を用いて一時的な放電を試み、そこで症状が軽快すれば、歯科用金属に帯電した電流が原因だと診断でき、金属性修復物の撤去によって改善が期待できることになる。ドイツでは3mA・89mV以上が有害とされている。

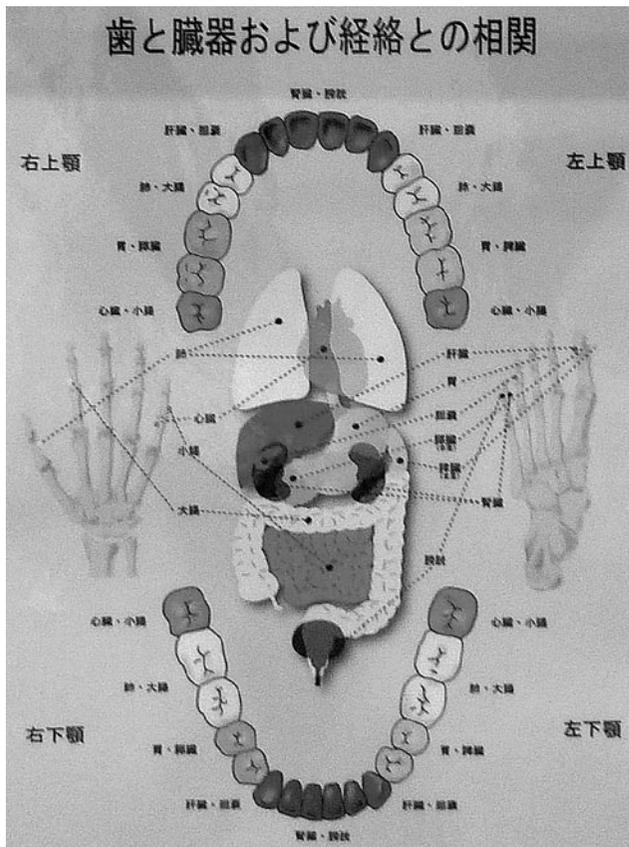
※診療内容の詳細は、2010年6月号特集参照。

状態、近年の「エレクトロスモッグ」といわれる社会環境の下で電磁波過敏症につながる因子となるといった問題があります。金属性修復物の中には、チタンなど「生体親和性が高い」ことが良いと評価されるものがありますが、仮にアレルギーを起しにくいなどの特性があったとしても、電磁波など別の側面から見た場合、ハイリスクな材料と見なされることもあります。そのため、当院ではジルコニア以外のインプラントは使わず、インプラントの適応範囲も極めて絞って判断しています。

歯は連結してはならない 脳脊髄液に影響

咀嚼や開閉口時に、歯はわずかに動いている（生理的動揺）。これによって脳脊髄液が正常に流れ、健康が維持されている。しかし、保険診療を中心に、欠損補綴としてのブリッジ、歯周病治療としての連結固定など、隣接歯との安易な連結が行われており、その結果、息苦しさや頭痛をはじめとするさまざまな不定愁訴をもたらすことがある。

そのような患者さんに対しては、連結された部位を切断することで症状が軽快することが少なくない。また、連結しないで補綴する方法としては、義歯、可動式のブリッジ（キーアンドキーウェイ）、取り外し式ブリッジ（テレスコープ）、インプラントが選択肢として挙げられる。



当院では、それぞれの歯は特定の臓器や経絡につながっているという説を採用している。この説から考えれば、現在でも広く見られる歯の連結処置は、極めて不自然な状態を生体を与えているといえる。

電磁波の影響を調べる アルミホイル巻き

歯冠修復物やインプラント体として用いられた金属が「アンテナ」の役割を果たしてしまい、肩凝りや首の痛み、しびれなど、電磁波過敏症の症状を引き起こしている症例がある。現代は携帯電話やパソコンなど、電磁波を出す器具が身近にあふれているため、リスクはかつてないほど高まっている。『ゼロテクター』などで放電しても症状が改善しない場合、電磁波の影響を疑ってみる。電磁波を頭頸部、特に口腔内の歯科用金属と遮断するために、写真のように口の周りを360度アルミホイルで巻いてみて、症状が改善するかどうかで影響を知ることができる。



症例検討

金属撤去を中心とした
全身的歯科診療

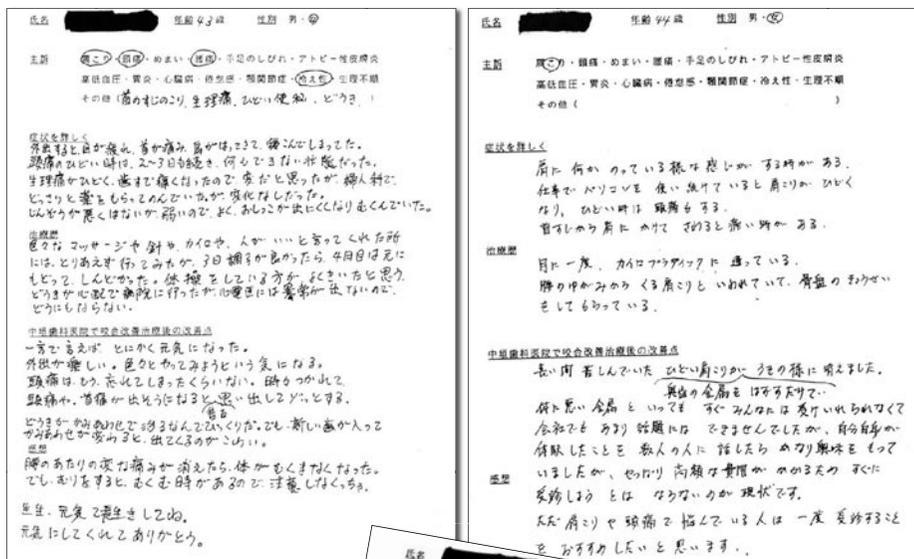
私は、肩凝りやめまいなど難治性の症状を訴える患者さんに対して、歯科治療だけでなく、併設する内科診療所や連携している鍼灸師とともに、東洋医学的なアプローチも含めて幅広い診療を行っています。しかし、過剰な期待を抱かせないように、まず初診の患者さんには、「皮膚のトラブルなら皮膚科に、腰痛なら整形外科に、頭痛なら内科や脳神経外科に行ってください。そこで改善しなかった場合に初めて歯科の問題を疑ってください」と伝えていきます。

これは、一般的には歯科医療の適応とは考えられていない症状に対してアプローチする以上当然のことで、患者さんには「あらゆる治療を試してみても、それでも治らなかつた場合に、選択肢の一つと考えるべき」と考えてほしいのです。過剰な期待を抱いてしまった結果、トラブルに発展することを避けるためと、東洋医学を含んだ特殊な診療であることから、むやみに誘引して、他の幅

広い治療法から患者さんを遠ざけることは禁忌であると考えているからです。

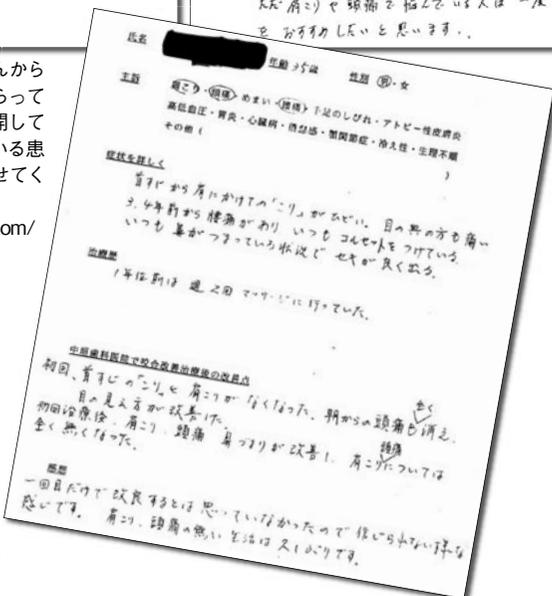
そのため、難治性症状を主訴として受診する患者さんとの間には、初診の段階

からある程度の合意形成ができていと思われまます。なお、このような症状を訴える患者さんは、男性よりも女性に多く見られます。



さまざまな症例について患者さんから直筆のアンケート(感想文)をもらっており、これをウェブサイトで公開している。類似の症状に悩まされている患者さんが、これを見て問い合わせることもある。

<http://www.ndc-questionnaire.com/>



症例① 正座できない、歩きにくい.....**義歯調整、アマルガム撤去**

30年来の hypertension の女性。「肩が凝る。階段の上り下りがきつい。ひざが痛くて正座できない」との訴え。



① 階段の上り下りがつらい様子。ひざが痛くて正座できないという。

義歯を調整したところ肩凝りは軽快し、歩行困難が改善したが、背中から腰にかけての痛みが治まらなかった。



② 義歯の形態を変えてみたところ肩凝りが改善し、歩行困難も解消したが、「まだ背中に痛みが残る」と訴えた。

そこでアマルガムを撤去したところ痛みが取れ、階段も軽く上り下りでき、正座もできるようになった。

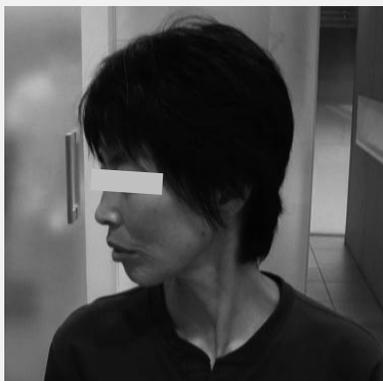


③ アマルガム充填を撤去したところ、背中への痛みも取れた。階段の上り下り、正座とも問題なくできるようになり、表情も若々しくなった。

症例② 目の奥の痛み、慢性疲労、呼吸困難感.....**放電、金属撤去**

慢性疲労が続き、パソコンの前になると気分が悪くなり、呼吸困難を覚えて日常生活が送れない状態となった。

目の痛みには②の金属性修復物、左側の肩凝りには③が関連していると判断し、順に『ゼロテクター』にて放電。症状が軽快したことから、これらの修復物を撤去した。その後、症状がすべて治まった。



① 日常生活が困難になるほど慢性疲労が続いていた。



② 『ゼロテクター』で放電したところ、症状が軽快。その後、金属製修復物を撤去すると、症状がすべて完治した。

症例③ 顎の痛み、足が上がらない ↓ 下顎の連結ブリッジ撤去

10年前に交通事故に遭った後、半月板損傷によって足の可動域が狭くなり、背中に痛みを感じるようになった。

顎の痛みと顎関節症を主訴に来院したが、「**1**」に連結ブリッジがあった。身体機能を確認後、連結ブリッジを撤去

したところ、顎の痛みや顎関節症が劇的に改善し、足の機能も回復した。



1 | 4-7にあった連結ブリッジを撤去した。



2 | 直後に顎の痛みが取れ、足の可動域が大きく広がった。

症例④ 7に金属の詰め物、右肩の痛み…足の支持骨の調整、放電、金属撤去



3 足の支持骨の調整を行う。



1 首から肩にかけて凝りや痛みを覚えていた。



4 『ゼロテクター』で金属製修復物の部分を放電。



5 症状が一時的にほぼ安定したため、金属製修復物を撤去。肩凝りが消失した。

2 原因としては、体幹の重心が右前方に偏っていることと、金属性修復物の存在が考えられた。

「7に金属の詰め物をした後、右肩に強い凝り、首の痛みを感じるようになった症例。もともと右で噛む癖があったが、修復物に違和感を覚えて左側で噛むようになった。全身の重心バ

ランスを診ると、右前側に重心が傾いていることがわかった。そこで足の支持骨の調整を行ったところ、首の部分の痛みは軽快したものの、まだ肩の部分に凝りが残っていた。

『ゼロテクター』で金属性修復物の部分を放電したところ、症状が一時的にほぼ安定したことから、この金属性修復物を撤去。肩凝りなどがすべてなくなった。

症例⑤ 首から肩・背中にかけての痛み等……………**↓ 金属撤去、足の支持骨の調整**

「7に金属性修復物。首から肩甲骨背中にかけて痛みと不快感が続いていた。最近では、めまい、ふらつき感も覚えるようになった。特に左後ろを向

くと強く痛みが出るという。原因と考えられる金属性修復物を撤去したところ、首の痛みは多少軽くなったものの、肩の痛みは残った。そ

こで、足の支持骨の問題を考慮し、タッチアンドトライにて部位を特定し、足の調整を行った。その結果、初診の段階で症状が軽快した。



1 頸部から肩にかけての痛みが続き、めまいやふらつきを覚えるようになった。口腔内には金属性修復物が多く見られた。撤去したところ首の痛みは治まったものの、肩の痛みが残った。



2 足をタッチアンドトライで部位特定。その後アジャスト。これによって肩の痛みも治まった。

タッチアンドトライ

足の支持骨がずれていることが、肩凝りなどの症状の原因となっている症例がある。その場合、支持骨を押す(症状が取れる)、離す(症状が戻る)を繰り返すことで、支持骨の部位と方向を特定してアジャストする。

症例⑥ なかなか治らない知覚過敏……………**↓ 足の支持骨の調整**

肩凝りがあり、噛み合わせ不良を訴える。また、長らく知覚過敏が続き、他院での歯科的なアプローチでは軽快しなかった。全身の重心バランスを診ると、右前に傾いていると判断できたため、足の支持骨の調整を行ったところ、歯科的な治療は一切行わずに、肩凝り、知覚過敏の症状が治まった。



1 歯科の対応が奏功しない難治性の知覚過敏。体幹バランスの異常と判断した。



2 足の支持骨の調整を行ったところ、症状が軽快。この間、歯には一切介入していない。